九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

魯迅の明治日本留学について ： 若干の史実問題の再考察

潘, 世聖
九州大学大学院比較社会文化研究科

https://doi.org/10.15017/15985

出版情報：Comparatio. 4, pp.30-44, 2000-03-30. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

魯迅の明治日本留学について
——若干の史実問題の再考察——

潘　世聖

はじめに

中国及び日本における魯迅研究は長い歴史を有し、魯迅の日本留学に関する研究について、資料的に出尽くした感がある。また、先行研究についても他の魯迅研究の分野には及ばないが、かなりの量の業績が蓄積されてきた。魯迅に関する資料の中で、日本留学期のものは最も乏しいと言って良く、日本留学時代の魯迅を一番よく知っている弟周作人でさえ「魯迅の生涯の中で、早年の研究資料が最も足りない。現在目に入るのは彼自身の『朝花夕拾』一冊だけだ……。他人の書いた回想も多くない」[1]と述べている。しかし、改めて資料調査を行うことを通じて、いくつかの分野、特に背景としての明治日本に関する分野の資料に対する分析により、従来の見方を修正し、資料を新しい観点から再把握することのできる可能性があることが判明した。したがって、本論は次のような「原則」に従って魯迅の明治日本留学を考察する。具体的には、魯迅の日本留学の全体的な様子を描出した後、疑義の存在するこれまでの「定見」に対して重点的な見なおしを行い、より客観的合理的な解釈を行う。またいくつかの実証不充分と思われる問題に対して、修正あるいは補足を試みる。

一

日本留学前の魯迅の経歴を簡潔に説明すると、以下のとおりである。1881（明治 14）年に中国南方の浙江省紹興に生まれる。1887 年に本家の家塾に入り、中国古典を中心とした啓蒙教育を受ける。1892 年、「三味書屋」という塾に入って、古典の勉強を続ける。1898 年、初めて「新式」の学校である南京の江南水師学堂（海軍学校）に入学。1899 年、江南陸師学堂附設鉱務鉄路学堂に転学、1902 年 1 月同校を卒業、3 月、官費留学生として、南京を旅立ち日本へと出発する。4 月 4 日、横浜に上陸。

魯迅の日本留学の動機について、これまでの研究はほとんどが新しい知識や救国の道を求めてのものと単純に解釈している。大づかみに言えば、こうした説明も間違いではないが、具体的な様子、経緯などについてはより一層の考察を必要とする。かつて魯迅自身は、いくつかの文章の中で自分の日本留学の動機についても触れたことがあり、それと他の関連資料を合わせて考えてみると、魯迅の日本留学の動機には次のいくつかの要素が指摘される。

まず、時代的風潮からの影響が一つの重要な要素であった。一言で言えば、魯迅の少年、青年期は、中国という国家自体が生存さえ問題になる危機に直面する時代であった。当時、中国はアヘン戦争以来、繰り返しヨーロッパ列強から攻められ、1895 年の「日清戦争」では日本に破れ、国土を失うに至って、国中に危機感にあふれ、先駆的な知識人をはじめ、中国人自らが立ち上が

り、外国に学び「維新」を図り、「自強保種」（自国を強くし、種族[民族]を守る）するように訴え、憂国の雰囲気が一般の人々の間に蔓延していた。魯迅の弟周作人の回想には、このようなことが記されている。「あれは多分甲午（1894）の秋から冬にかけての頃で、左寶貴（日清戦役の勇将、平壌の戦いに戦死を遂げた）の戦死の後であったろう。彼（魯迅の父親）は又こう言ったことがある。今息子が四人いるから、将来一人は西洋へ、一人は東洋＜日本＞へやって学問をさせられる。」[2]この文章から国家存亡の憂患意識が民衆まで浸透していたことが窺える。そうした危機感から、外国へ留学に行き、外国の良いものを学ぶことによって中国を救おうということは多くの人に意識されたのである。例えば、1903年、東京で学ぶ浙江省出身の留学生たちは、故郷の親たちへの書簡[3]の中で、次のように呼びかけている。

> 今、中国は極めて古びかつ腐るに至ったので、その中国を新しくすることは決して一人の力によってできることではなく、多数の青年子弟は海外へ留学に行かなければならない。これはすでに明確なことになっている。

1898年、康有為、梁啓超などは皇帝の支持を得、日本の明治維新を真似た「戊戌変法」（制度改革）を起こしたが、百日で失敗した。1901年1月29日、清王朝政府はいわゆる「親政運動」の国政改革を行った。内容は主に官制と学制の改革であった。学制においては、初めての大学「京師大学堂」（今の北京大学）が創立され、そして各省にも洋式学校を設置し、留学生を派遣せよとの命令が下された。こうして、数多くの青年が外国に留学生として派遣され、急速に留学ブームが高まった。魯迅の留学もこの大きな背景に当然関わっている。魯迅自らも当時の留学を語っており、「政府は又外国の政治法律や学問技術も取るべき処があるものとした。自分の日本へ留学することを熱望したのもその時である」（「現代支那における孔子様」、1935年6月、今村与志雄訳）という。

次に留学は、魯迅個人の新しい世界、新しい人間を求めようという強烈な願望の実現でもあった。18歳まで、魯迅はずっと故郷の塾で伝統的な古典教育を受けていた。彼はその旧式の勉強や保守的沈滞的な環境に強い不満を抱き、「故郷」を脱出し、活気のある、新しい天地を求めようとしていた。そのため、魯迅は当時一般的に認められていた「科挙」試験を受け役人になるという考えを捨て、思いきり近代的な知識を教える学校に入った。

> 私がN学堂（江南水師学堂――筆者）に入ろうと思ったのも、異なった道に進み、異なった土地に逃れて、別の人々を探そうと思ったからだったようだ。……当時は学問をして役人の試験を受けるのが正道であり、洋学の勉強などというのは、世間では、行きどころのない人間が、しかたなく魂を毛唐に売るもの、大いに軽蔑し排斥してしかるべきだ、と思われていた……。この学校で、はじめて世の中には、物理化学、数学、地理、歴史、製図、体操というものもあるのだ、ということを知った。（「吶喊・自序」）

このように積極的に新世界、新人生、新知識に情熱を燃しつつ、魯迅は「一等第三名」という

優秀な成績で鉱務鉄路学堂を卒業した。そして、官費留学生として日本に派遣される。このことは当時の新聞記事にも取り扱われた。1902年2月18日の『中外日報』には、「記江寧興学事宜」というタイトルの下で、「陸師学堂俞恪士観察前奉江督札委赴日本考察各学堂章程、現聞定於二月初旬首途、併携帯学生若干名出洋遊学」と記されている。魯迅自身の文章の中で「熱望」という語を使っているように、魯迅は日本留学に非常な情熱を傾けていた。しかし、当時の段階で、日本に行き、具体的に何を学び何を目指すかについてはなお明確ではない。医学か文芸かあるいは思想啓蒙かという問題はすべて日本に来てさまざまなことに触発され、最終に決定されたもので、それは文芸をもって国民の精神を変えようという形に定着した。しかし、明治維新から迅速に発展を遂げてきた日本社会に接して、母国にない、先進的なものを学んで祖国への貢献を果たし、自分の理想を実現させようという熱烈な願望こそが魯迅の内在的な目的であり、それはこの時代の青年たちが共有した「愛国」の壮烈な志向でもあった。魯迅たちが日本へ出発する前、親しい学友である胡韻仙から次のような送別詩が送られており、魯迅を含め当時の青年たちの思いがそこに窺われる。

英雄大志総難侔、夸向東瀛作遠遊、　極目中原深暮色、回天責任在君流。

乗風破浪気豪哉？上国文光異地開、　旧域江山幾破砕、勧君更展済時才。[4]

二

1902年3月24日、魯迅一行は日本の船＜大貞丸＞で南京を立った後、上海を経て4月4日に横浜に到着、4月7日東京に着いた。同月、周作人宛の書簡の中で、「二十六日（旧暦――筆者）、横浜に到着、現在、東京麹町区（現在の千代田区――筆者）平河町四丁目三橋旅館に宿泊している。近日中、成城学校に入学の予定」[5]と述べている。しかし、当時留学生向けの陸軍士官予備学校である成城学校に入るには、中国留学生陸軍監督の審査が必要で、魯迅の学んだのが鉱務だったため、結局、そこへの入学ができず、4月20日に弘文学院に入学した。同じ周作人への手紙には、「弘文学院に入学した。牛込区西五軒町三十四番地にある。校長は嘉納治五郎先生、学監は大久保高明先生、教師は江口先生といい、漢文に熟達しているが、会話は出来ない」[6]としている。

弘文学院は19世紀末から20世紀初頭までの中国人の日本留学ブームに応じて設けられた普通の私立予備学校に過ぎなかったためか、日本での一般の教育関係資料の中にはほとんど取り上げられていない。しかし、文学者魯迅だけでなく、有名な政治家黄興、陳独秀などはみな弘文学院で学んだことがあることで、中国人にとっては弘文学院は格別の意義を有している。弘文学院については、実藤恵秀の『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960年3月初版、1970年10月、増補版が出版される。中国語訳本もある）に記述があり、細野浩二「境界の上の魯迅――日本留学の軌跡を追って」（『朝日アジアレビュー』通巻第28号、1976年第4号）にも、関連資料が網羅されている。ここでは、この二種類のものに基づき、他の関連資料も参考にしながら、弘文学院の概況を整理しておく。

弘文学院の前身は「亦楽書院」であった。1896（明治 29）年、清王朝政府ははじめて十三人の留学生を選抜し、日本に派遣した。そこから近代における中国人の日本留学がスタートした。当時、中国駐日公使の裕庚が留学生の入学の件で、外務大臣兼文部大臣の西園寺公望に依頼している。西園寺公望はまた東京高等師範学校校長の嘉納治五郎に委託した。しかし、嘉納治五郎はこれらの留学生が日本語を知らず、そして近代的な科学教育も受けていないため、高等師範学校入学は困難だと判断した。そのため、神田区三崎町二番地に一戸を借り入れ、学校兼寄宿舎とし、日本語や普通科の教育を行うようにした。1899 年、この最初の留学生たちは三年間の勉強を終え、卒業した。同年 10 月、嘉納はこの「塾」を「亦楽書院」と名づけて、引き続き中国人留学生に対して教育を行った。1902 年 1 月、魯迅の日本留学の二ヶ月前、亦楽書院は校名を弘文学院という名に改め、牛込区西五軒町で開校した。この年、嘉納は中国へ教育視察のために渡り、多数の中国高官を歴訪して、意見の交換を行ったので、彼の帰国後、弘文学院に入学する学生は、ますます多くなった。以後、いくつかの分校校舎を増設したが、1905 年に「清国留学生取締規則」事件で多数の留学生が帰国したため、学生数が減り始めた。さらに中国国内においても新式の学校がどんどん設立され、普通教育が普及してきたため、清王朝政府は 1906 年に赴日速成学生（短期留学生）の派遣を中止した。こうした一連の理由で速成科志望者は大幅に減少した。こうして 1909 年、ちょうど魯迅が日本留学を終え帰国した年、弘文学院は閉校した。統計によれば、閉校までに弘文学院への入学を許可された者は 7192 人、卒業した者は 3810 人であった。

1902 年、つまり日本留学の一年目、魯迅は弘文学院で日本語や普通課程の勉強に全力を尽くしていた。当時の同級生は「当時、魯迅の弘文での日本語の勉強はかなりすごいもので」、「普段毎日深夜まで一生懸命に勉強し、驚かせられる程の意志力であった」[7]と、魯迅の生活ぶりを語っている。勉強の外、よく神田の古本屋及び南江堂、丸善へ行き、限られた金を書籍雑誌の購入に使っていた。ちなみに、当時魯迅の「官費」が月 36 円であったのに対して、弘文学院の年間授業料及び寄宿費は 300 円であった。[8]

1903 年、弘文学院での二年目から、魯迅の活動は学校の勉学の範囲を超え、さまざまな面にまで及び始めた。特に彼の生涯にわたった中国人への精神啓蒙・思想啓蒙・科学啓蒙の活動に力を入れ始め、祖国の危機、中国人の精神を救うために自らの力を捧げる信念が固まった。1903 年、よく研究者に引用される「自題小像」（自ら小像に題す）という詩を書いた。「霊台無計逃神矢、風雨如盤闇故園、寄意寒星荃不察、我以我血薦軒轅」（霊台　神矢より逃るるに計無く／風雨は磐の如く　故園は闇し／意を寒星に寄するも荃は察らず／我は我が血を以て軒轅に薦めん）。壮烈な愛国意識を鮮明に反映している。そして、同じ浙江省紹興出身の留学生と一緒に故郷の人々へ「紹興同郷公函」という手紙を送って、故郷の青年が日本へ留学に来ることを呼びかけている。そこには「宇宙に向かって知識を求め、世界に向かって学問を探る」ことを通じて、「我が国民の夢を覚めさせて、我が国民の精神を喚起せよ」[9]という一文があり、これはまさに当時の魯迅の思いとぴったりと一致している。

魯迅はまず「宇宙に向かって知識を求め、世界に向かって学問を探す」ということを実践した。当時の日本は文明開化の流れに乗って、ヨーロッパの文明を一生懸命取り入れ、まさに近代ヨーロッパのいろんな思想・思潮の流行・実験の「場」になっていた。魯迅はそうした思想的文化的

な条件をよく利用して、日本、日本語を通じてヨーロッパの新しい思想学説に接触した。南京の江南路鉱学堂時代、魯迅はすでに新知識、新思想を宣伝する雑誌新聞に触れ始めていたが、しかし周作人の言っているとおり、「魯迅がより広範に新しい書物に接触したのは、やはり壬寅（1902）年二月、日本に来てからのことであった。」[10]弘文学院の同級生許寿裳も「弘文学院にいたとき、魯迅はすでにかなりの日本語書籍を購入して机の引き出しに置いていた。例えばバイロンの詩やニーチェの伝記やギリシャ神話やローマ神話などがあった。」[11]魯迅は「読書に強い興味を持って、決して大部分の人のように教科書だけを読むことでなく、書籍の購入の幅もとても広かった」[12]と証言している。もう一人の同級生も弘文学院時代で「魯迅はすでに欧米と日本の書籍を渉猟して、日本語を学びながら翻訳をしていた」[13]と語っている。また近代ヨーロッパ哲学著作の中国語訳本もよく目にしていた。梁啓超などの主宰した新聞雑誌『新民叢報』『新小説』及び留学生の編集した雑誌『浙江潮』『江蘇』『訳書彙編』なども講読し、高い関心を示していた。また、浙江省出身の留学生と一緒に編集した浙江省留学生「同郷会」の雑誌である『浙江潮』に何回も投稿したこともある。この時期、魯迅はさまざまな知識や思想を積極的に摂取し、数多くの情報を手に入れ、「新しい世界」への認識を深めるとともに、中国の改革の必要性、中国人に対する近代的啓蒙の必要性を切実に感じるようになった。

1903 年、魯迅が最初に着手したのは、やはり科学知識の紹介、科学思想の啓蒙と科学小説の翻訳であった。1904 年 3 月に弘文学院を卒業した時点まで、時間的順序をおって主な「作品」を列挙すれば、以下のとおりである。

「スパルタ魂」（翻訳）、月刊『浙江潮』第 5、9 号、1903 年 6、11 月。

『月界旅行』（翻訳）、東京進化社、1903 年 10 月。

「ラジウムについて」（論文）、月刊『浙江潮』第 8 号、1903 年 11 月。

「中国地質略論」（論文）、月刊『浙江潮』第 8 号、1903 年 11 月。

「地底旅行」（翻訳）、月刊『浙江潮』第 10 号、1903 年 12 月。

『世界史』（翻訳）、原著者不詳、未発見。

『北極探検記』（翻訳）、原著者不詳、未発見。

『物理新詮』（翻訳）、原著者不詳、未発見。

1903 年 5 月 2 日東京の『時事新報』に、「ロシア現在の政策は、断乎、東三省を取ってロシアの版図に入れようとするものである」というロシア公使の談話が掲載された。これにより、留学生たちは強いショックを受け、義勇隊を組織し、政府にロシアに対抗することを提議した。1903 年 5 月に出版した『浙江潮』第 4 号を調べた結果、当号の「留学界記事」欄には、「拒俄事件」と題する記事があり、留学生の抗議活動、演説などを記しているのである。こうした背景の下、魯迅はローマの勇士スパルタクスが侵略者に抵抗した物語を翻訳して、自分の愛国意識を表したのである。「中国地質略論」は中国の地質、鉱産情況を紹介しているが、自国の科学の遅れによる危機、外国が中国の分割を図り、その鉱産資源を狙っていることを強調している。地質科学の紹介より、むしろ国民に向かって、「亡国」の危険が目の前にあることを伝えようとしている。

『月界旅行』と「地底旅行」の翻訳は明らかに明治日本における科学小説の流行と関わっている。周作人はこう言っている。当時日本で、「影響の大きな作家はジュール・ヴェルヌであり、彼

の『十五少年』や『海底旅行』は雑誌で最も人気を集めた作品で、当時魯迅が『月界旅行』の翻訳を決意したのもこのためである。」[14]両書はともに日本語訳からの重訳で、『月界旅行』は井上勤訳『九十七時二十分間　月世界旅行』（東京自由閣、1886年9月）、「地底旅行」は三木愛華・高須治治訳『拍案驚奇　地底旅行』（1885年）にそれぞれ拠っている。魯迅の来日当時、ヴェルヌブームはその最盛期を過ぎていたが、ヴェルヌの小説はすでに一定の評価を得していた。[15]やはりこのような日本でのヴェルヌ人気が魯迅の翻訳の動機に作用していたと言えよう。

魯迅がこうした科学小説を翻訳した究極の目的は、科学小説の紹介を通じて、中国と中国人の進歩に寄与することにある。彼自身が「解説」の中で書いているように、科学小説を通じて、「一斑の知識を得、遺伝された迷信を打ち破り、思想を改良し、文明を補うことができる。その力の大きさたるや、このほどのものである。」「その意味でも現代翻訳界の欠点を補い、中国の群衆を導いて前進させようとするならば、かならずや科学小説より始めるべきなのである。」（「『月界旅行』解説」、藤井省三訳）。富田仁は、明治期におけるヴェルヌ小説受容の背景を「ヴェルヌの小説に盛りこまれていた科学万能思想と功利思想が近代国家として急速に発展していかなくてはならなかった当時の日本の社会ではきわめて魅力的なものに受け止められたようである」[16]と説くが、これは魯迅にも十分にあてはまるものであろう。

弘文学院における翻訳をはじめとした活動から見れば、この時期の魯迅は自然科学に大いに関心を持ち、「科学の振興」が祖国を救う道の一つだと考えている。つまり、魯迅の本意は単純な科学知識の普及でなく、人々を科学研究に導いていくことでもなく、科学啓蒙を通じて、人々が「一斑の知識を得、遺伝された迷信を打ち破り、思想を改良し、文明を補うこと」なのである。そして、こうした危機から祖国を救い出そうという基本的な意識は後に自然科学を捨て、文芸で自分の使命を果たすという人生方向の転換にも繋がっている。

三

1904年4月、魯迅は弘文学院での二年間の勉強を終え卒業し、6月に仙台医学専門学校入学の手続きをとる。9月、仙台医専に入学し、1906年3月、仙台医専を退学するまで、一年半の医専学生生活を送った。しかし、本来魯迅が仙台医専に在学していた時、全校では外国人は彼一人しかいなかったからかもしれないが、この時期における魯迅の伝記資料は最も少ない。こうした状況が長期間続いたが、1978年2月、東北大学の研究者を中心としたグループが、仙台における魯迅に関する資料を細かく調査整理し、四百頁余りにわたる『仙台における魯迅の記録』（仙台における魯迅の記録調査会編、平凡社、1978年2月）を出版した。そのすぐれた研究によって、仙台医専時代における魯迅伝記資料上の空白が大いに埋められたと言える。

しかし、魯迅の仙台医専に入学したことについては、いくつかの疑問が浮かび上がってくる。第一点は、魯迅がなぜ大学（当時の帝国大学）でなく、専門学校に入ったのか、第二点は、魯迅は本来中国で「鉱務」、即ち地質採鉱を専攻し、弘文学院でも日本語と自然科学を中心とした科目を学んだのだが、なぜ後に「鉱務」とまったく関係のない医学を選んだのか、第三点は、なぜ東京を離れわざわざ都会ではない仙台医学専門学校に入ったのかという疑問である。

三つの問題については、第一点はこれまで研究者に注意さえも払われてこなかった。第二点と第三点も正面から究明されることはなく、ただ魯迅自身の書いたものの中におけるわずかの個所に依拠して問題は片付けられている。確かに、魯迅は自著の中で自分が南京の新式の学校で近代的な知識を学びはじめたことを述べた後、続いて次のように言う。

> それに翻訳された歴史を通じて、日本の維新が多くの部分、西洋医学に端を発している事実も知った。こういった幼稚な知識のせいで、やがて私の学籍は、日本のいなかのある医学専門学校に置かれることになった。私の夢はばら色だった。卒業して帰ったら、父のようなめにあっている病人の苦しみを救おう、戦争のときには軍医になろう、そして一方では、国民の維新への信念を強めよう、というつもりだった。(「吶喊・自序」)

魯迅のこの文章はしばしば研究者に引用され、すでに魯迅が医学を選択したことに対する「公式」の解釈になっている。もちろん魯迅本人は複数の個所で同じようなことを言っているため、それが一つの原因だということは間違いない。しかし、魯迅の以上の発言はいずれもそれぞれの背景を有し、強調の重点も異なるものであるため、それに頼って簡単に問題を片付けることは明らかに説得力不足と思われる。故に、ここにおいては、当時魯迅が弘文学院を卒業した頃の周辺情況を調べ、魯迅の友人の証言などをよく吟味して、問題を検討する。

当初、魯迅たちを日本へ派遣した両江総督劉坤一は、魯迅たちが弘文学院で補習を受けた後、東京帝国大学工科大学所属の採鉱冶金学科[17]に入り、引き続き南京で学んだ専攻を勉強することを望んでいた。しかし、実際にはそれはまったく不可能なことであった。というのは、いわゆる帝国大学（東京帝国大学と京都帝国大学しかなかった）に入学するには、まず帝国大学の予備教育機関としての高等学校（うち三年制の大学予科課程が設けられる）に入らなければならないのである。これに関して、当時の留学生による記録なども残されている。筆者は浙江省日本留学生「同郷会」の雑誌『浙江潮』（1903 年 2 ～11 月）を調べた結果、同誌第 7 号の「通信欄」に掲載された浙江省日本留学生同仁名義の「敬上郷先生請令弟子出洋遊学並籌集公款派遣学生書」には、次のような記載がある。例えば、「工学」を目指す場合、「中学校、師範学校卒業程度なら、東京高等工業学校あるいは実業教員養成所に入る」。また、同程度の資格で「試験に合格なら、高等学校に入り、三年間の勉強を経、大学校に入る」ということである。しかし、当時、東京帝国大学と京都帝国大学入学希望者が多かったため、文部省から高等学校自身まで中国人留学生の受け入れにたいへん慎重な対応を取っていた。魯迅は明治 37 年に弘文学院を卒業したが、翌 38 年には文部省から東京の第一高等学校にこうした「通牒」が下された。

> 清国人ニシテ近来貴校に入学ヲ志願スルモノ少ナカラサル義ト存候処両帝国大学ハ現在ノ高等学校生徒ヲ収容スルニサヘ困難ヲ感シ居候次第ニ付清国人ニシテ貴校ヲ卒業スルモ将来帝国大学ニ進入スルコト能ハサルカ如キ結果ト可相成就テハ本省ニ於テモ目下右収容方法ニ付計画中ニ有之候ヘトモ当分第一部ノ外外国人ノ入学ヲ許可セントスルトキハ前以テ本官ニ御内議相成度依命此段申進候也。[18]

つまり、魯迅が弘文学院を卒業した明治 37 年の時点で、中国人留学生の一高入学は基本的に不可能でり、更に言えば帝国大学入学は不可能であった。こうした状況は翌 38 年になって、大きく変わった。11 月、文部省第十九号令をもって清国人を入学させる公私立学校に関する規程が定められた。その前の 8 月、文部省普通学務局長よりの通牒があり、民間における中国人留学生教育の施設としての弘文学院及び東京同文書院を卒業した留学生に対して、「相当の学力を有するものと認め」、一高への入学を許可し、成績優良のものの無試験入学も認められた。[19]それ以降、留学生の一高入学の厳しい状況は一変した。

しかし、37 年の時点では、状況は異なっていた。その理由からか、弘文学院の江口という先生は、魯迅ら南京からの留学生に「中国駐日公使が全力で文部省と交渉しても、江南路鉱学堂からの学生をすべて一高に入れることは無理だろう」と、帝国大学進学の厳しさを語っている。そして、江口先生は魯迅らに専門を医学の方に変更し、医学専門学校に入るように勧めた。その理由は、日本の医学はかなり進んでおり、ドイツとあまり変わらない。むしろイギリス、アメリカ、フランスより進んでいる。また、工科、農科学校より、医学学校の方が数が多くて留学生に対する規制もないので、入りやすいという利点があることを挙げたという[20]。実際の情況を調べてみると、魯迅の日本留学前の年、即ち明治 34 年、文部省令第八号が発され、各高等学校の医学部を独立させ、医学専門学校とするよう定められ、千葉医専（一高）、仙台医専（二高）、岡山医専（三高）、金沢医専（四高）、長崎医専（五高）ができた。明治 36 年の専門学校令によって、以上の五校は官立医学専門学校となった。他に、東京、京都、愛知県、大阪、熊本に公立私立の五校が認められ、十校に達している。[21]こうして、魯迅は高等学校の専門部と同格の専門学校に入学したわけである。医専の場合、修業年限が他の専門より一年長く、大学と同じ四年間で、医者にもなれる。ただ、医学士の学位をもらえないだけであった。

当時、中国留学生の大部分は東京、横浜に集中しており、医学専門学校も官立の千葉医専と私立の東京慈恵医専があり、魯迅と同時に卒業して専門を医学に決めた留学生はほとんど東京近辺を離れなかった。[22]一方、魯迅は中国人留学生から距離を置きたいと考えていたので、当時金沢医専に在学中の中国人留学生王立才から、東北地方の仙台医専は偏遠なところにあり、中国人留学生がいないということを聞き、仙台医専に入学申請を出して、9 月に仙台医専の学生になって、東京を去った。

それでは、魯迅はなぜ中国人留学生から距離を置きたかったのかと言うと、周作人の述べているように、「魯迅は東京で清国留学生を見て嫌っていたので、東京を離れて仙台医専に入ろうと決意した」のである[23]。魯迅は名文「藤野先生」の中で皮肉な口調で「清国留学生」の姿を描いている。

> 東京も同じことだった。上野の桜が満開になったところを遠くから眺めれば、たしかに紅の霞たなびく感があったが、その花の下のあちこちには、きまって速成班の「清国留学生」連中がたむろしていて、長い辮髪を頭上にまとめてとぐろを巻かせ、学生帽の天辺をこんもりと盛り上げて、富士山にしているのだった。また辮髪を解き、平らにまとめている者もいたが、帽子をとれば髪油でテカテカで、小娘のまげさながら、そのうえ、今にも、首をかし

げて科を作らんばかりの風情は、なんともはやお見事なものであった。中国留学生会館の門衛室ではちょっとした本が手に入ったので、ときどき顔を出してみるだけのことはあった。午前中なら、奥のいくつかの洋間で休むことも出来た。だが、夕方になると、あるひと間の床がきまってドスンドスンと鳴り出し、そのうえ部屋中にもうもうたる埃が立ちこめるのである。消息通に尋ねてみると、「なあに、ダンスの練習をやっているんですよ」とのことだった。

よその土地に行ってみたら、どうだろう。(「藤野先生」、立間祥介訳)

魯迅は同じ中国人留学生の俗物性に嫌悪感を生じ、憂鬱や孤独を感じていた。結局、個人では変えられない現実に直面し、避けるしかなかったのである。そこで、留学生のいない、北の町仙台に行こうと決意した。仙台に行くという行為の裏には、魯迅の寂しく悲しい心が秘められている。

しかし、仙台に行ったとしても、憂鬱や孤独から解放されることはなかった。確かに生涯敬愛することになる藤野先生に出会い、多くの日本人から暖かい待遇を受けたこともあったが、しかし、悲劇的な時代に弱小国からやってきた留学生の一人として、魯迅もやはりさまざまな刺激ないし屈辱を感じざるを得なかった。例えば、「藤野先生」に記述される日本人学生によるいやがらせ事件[24]及び有名な「幻灯事件」は典型的な例だと言える。「中国は弱国であるから、中国人は当然低能児であり、六十点以上の成績は自分の能力を超えたものであったという訳で、彼が不審を抱いたのも当然と言えた」という魯迅の言葉から彼がたいへんな衝撃を受け、耐えがたい屈辱にうちのめされたことが想像できるだろう。もともと魯迅個人の性格にきわめて敏感な面があり、少年時代家庭が貧窮に陥っていた際に、何度も「侮蔑」を体験したという魯迅の語りから彼のこういう性格がよく窺える。[25]したがって、日本の研究者の考えているように、このいやがらせ事件による「屈辱感はおそらくなまやさしいものではなかったであろう。」[26]

当初、東京にいる同胞たちを避けるため、仙台に逃げてきた魯迅ではあるが、しかし、実際に仙台に来たことで、またもう一種の寂しさを感じるようになった。仙台に来てから、友人への手紙の中で、「自分の影法師とて話にもならず、無聊をかこっており」「はるかに故郷を思うと、やはり長く寂莫たる思いが消えません」(「蒋抑卮宛、1904 年 10 月」) と、自分の心境を語っている。

ところで、周知の通り、仙台での学生生活はわずか一年半しか続かなかった。1906 年 3 月、魯迅は突然仙台医専を退学し、医学を捨て文学に転向しようと決意した。この医学から文学への転換について、魯迅自身は「幻灯事件」[27]によって国民の精神を救おうとしたことを述べている。中国の研究者は基本的に魯迅自らの説明にしたがってこの問題を理解している。しかし、日本では、早く竹内好からこの説に反対する意見が出され、近年でもなお論議を呼んでいる。筆者も、以前よりこのことに対して関心を抱いており、以下関連資料及び筆者の個人的見解を整理してみたい。

戦後日本の魯迅研究に決定的な影響を与えた竹内好は、「幻灯事件」を契機とした魯迅の文学への転向という有名な「挿話」について、「伝説化」されたものであって、「その真実性に疑いを抱

く」[28]と述べている。

> 彼は、同胞の精神的貧困を文学で救済するなどという景気のいい志望を抱いて仙台を去ったのではない。おそらく屈辱を噛むようにして彼は仙台を後にしたと私は思う。医学では駄目だから文学にしてやれなどという余裕のある気持ちではなかったろうと思う。(中略)ともかく、幻灯事件と文学志望とは直接の関係がないというのが私の判断である。[29]

それ以降、幻灯事件の真偽に関しては、さまざまな議論がなされ、若い世代の研究者も迷いを持ちながら、「幻灯事件とは、この長い歳月を経て魯迅の胸中に形成された＜物語＞であ」った[30]と、「幻灯事件」の＜伝説化＞説に近い見解を示している。また、日本の研究者の中には、魯迅の文章の芸術性、つまり虚構性から問題を解釈する見方も存在している。ただ、『藤野先生』のような、実在の人物、過去の出来事を語る回想文は真実性がその基本的な性格であると一般に考えられるため、意識的に虚構化する可能性が低いと考えられる。また、自分の人生の転換にとってきわめて重大で意味がある事件であるから、覚え間違った可能性もないと言って良いだろう。

魯迅の医学から文学への転換を絶対化あるいは単純化する見解には賛成できない。魯迅の転換は単に一つの幻灯事件によるものではなく、それは彼の内外にあるさまざまな要素の総合作用、積み重ねによって生じた結果であると言いたい。仙台での生活が孤独で寂しいものであり、更にそうした中にあって、日本人学生によるいやがらせ事件の発生は、魯迅に大きな衝撃や屈辱を与えた。そういう意味で、魯迅が仙台を後にした行動は彼の悲憤や抗議の反応であり、同時に彼の性格の論理的なあらわれだったと考えられる。それでは、医学を捨て、何をするのかという問いも当然出てくる。前々からずっと国民の精神の覚醒が何よりも大事のことと考え、そして国民の精神を覚醒させる最も有力な武器が文芸だという信念を有していたので、今回の「幻灯事件」がちょうどそうした思いをよみがえらせ、医学をやめることをきっかけとして、文学によって人間の精神を変えることが現実となったのである。偶然の機会によって、必然的な転換が 1906 年の仙台で現実となったのである。

四

仙台での医学生生活を中止し、1906 年 3 月、魯迅は東京に戻って、比較的自由に文芸活動、思想啓蒙活動を始めた。初め、魯迅は自分の学籍を東京独逸学会ドイツ語学校に入れておき、引き続き官費を受領していた。しかし、実際に魯迅はあまり学校に通わず、久しぶりに自分の好きなことをやり始めた。最初の数ヶ月間に魯迅は弘文学院時代に友達と着手した『中国鉱産誌』と『中国鉱産全図』を完成させ、1906 年 5 月に上海の普及書店から出版した。7 月には、三版まで出され、好評を得ている。夏、母親の意に従って、嫁を迎えるために帰国、四日後、日本へ留学することになった弟の周作人をともなって日本に戻ってきた。[31]

弘文学院時代と異なり、二度目の東京生活は前よりずいぶん楽になったようで、「一番自由で無拘束だった」[32]と言われる。最初、本郷区湯島二町目にある「伏見館」に下宿した。周作人の話

によると、家賃がわりと安く、食事つきで、月十円だったが、毎月三十六円の官費なので、少し余裕が出てきている。朝はパン、バター、牛乳で、昼食、夕食も満足していたようだ。[33]普段から日本風な日常生活をして、意識的に日本の生活を体験しよう、日本の社会、文化を深く理解しようとしていた。[34]周作人は多くの回想文の中で次のように語っている。この頃、魯迅の服は「すべて和服だけで押し通した」、「平常はどこへ行く場合でも、帽子は鳥打帽で、和服に袴という服装であった。」「彼の風采は日本の貧乏な学生に似ていた。」[35]その理由は、当然日本の習慣に従うことであり、もう一つは、当時中国を支配していた満州族王朝への対抗意識のあらわれでもあった。つまり、清王朝の満州族の服装は「民国以前にはみな胡の服と見なし、東京でそんな衣服を着るのはつまり奴隷の表示だとしていた」ので、「和服をもいいものだと思ってよく着た」[36]ということであった。他にも、周作人の回想しているように、「魯迅は東京における数年間、衣食住すべて簡単にしていた。彼は洋服を着ず、テーブルや椅子を使用しなかった。留学生たちが寝台のないのに閉口して、押入れの上段を寝床にしているのを、彼は非常に嘲笑していた。彼自身は畳の上に坐臥することに少しも不自由を感じなかった。」[37]

日常生活の中で、もう一つの重要な内容は古本屋をまわって古本を手に入れることであった。それは弘文学院時代からの習慣で、「留学時代には教科書の授業を受け、教科書と同じ講義をノートする以外に、当然楽しみがあるもので、私の場合、神田区一帯の古本屋をのぞいて回るのがその一つであった」(「『小さなヨハネス』序文」、藤井省三訳)。周作人はより詳しい「記録」を残している。「新書や古書を買う快楽で、日本橋、神田、本郷一帯の洋書和書の新本屋、古本屋、雑誌店、夜店を日夜ひやかし廻って疲れるものを知らなかったものだ。」[38]当時魯迅と周作人のよく行った洋書店は南江堂、郁文堂及び南陽堂で、和書を求める際、本郷区真砂町にある相模本屋をよく利用していた。魯迅兄弟は主人の小沢民三郎とよく知った仲になり、小沢がかつて丸善で働いたことがあるため、ドイツの本を入手したい時、よく彼を通じて丸善に頼んで購入してもらった。晩年にも、何回も丸善を通じ西文雑誌を注文した。魯迅兄弟はともにこの丸善と関わりがあり、好感を有していた。晩年の魯迅は友人の増田渉に対して、もし日本に行く機会があれば、まず母・校の仙台医学専門学校を訪ねて、次は丸善書店を再訪したいと言っていたようだ。[39]周作人も同じような思いを抱いており、こう書いている。「東京の本屋といえば第一に思い出すのは何と言っても丸善(Maruzen)である。」「私が丸善から本を買うのは足掛け既に三十年にもなり、まず老顧客といってよかろう、もっともその取引は極めて小さく、その後また和書と中国の古書とを買うことになって、財力がいよいよ分散した。しかしその僅かばかりの洋書こそ私にとって極めて大きな影響を与えたのである、だから丸善は一個の法人ではあるが私にとっては実に師友の誼みがあるといえるものである。」[40]

こうした生活の中で、自分の念願の文芸活動を始めようとしていた。まず同じように文芸志向を持っている同志を集めなければならない。しかし、「東京の留学生には法律政治、物理化学さらに警察、工業を学ぶものはたくさんいたが、文学や芸術をやる者はいなかった。しかし、冷淡な空気のなかでも、さいわい、数人の同志が見つかり、そのほか、なくてはならぬ数人も集まった。相談のすえ、第一歩としては当然雑誌を出すことになった。誌名は<新しい生命>の意味をとり、私たちは当時、みないくらか復古に傾いていたから、単に『新生』と呼んだ。」(魯迅「吶喊・自

序」、丸山昇訳）しかし、人材や財政的理由で、結局計画の途中で失敗することになった。以後、魯迅は資料収集、読書、翻訳活動に力を注いだ。

さまざまな活動を経た後、1907年から1908年にかけて、魯迅は当時日本で流行しているさまざまな思潮を十分に接触、摂取した上で、思想・文化・科学啓蒙的な論文を書いた。いわば青年期の「魯迅思想」の基本的な形を作り上げ、その様相を世の中に提示したのである。同時に、そこには自らの思想と明治日本との関係、彼自身の外国思想文化への対処方法もよく現れている。日本留学期の思想的結晶としての論文は、主に河南省出身の留学生による『河南』（月刊、東京において、第9号まで出版された）に掲載された以下の五篇である。

「人の歴史」、『河南』第1号、1907年12月。

「魔羅詩力説」、『河南』第2、3号、1908年2、3月。

「科学史教篇」、『河南』第5号、1908年6月。

「文化偏至論」、『河南』第7号、1908年8月。

「破悪声論」、『河南』第8号、1908年12月。

以上の論文は日本語に翻訳すると、四百字詰原稿用紙になおして二百五十枚にも及ぶ分量となる。こうした論文から当時魯迅がいかに勤勉に読書し、執筆していたかが見て取れるが、特に魯迅の関心、日本の流行思潮との接触、彼自身の思考の方向など、いろいろな情報を読み取ることが可能で、そうした意味で日本留学期における魯迅の思想を解く鍵だと言える。この問題については、別に考察する予定である。

1908年秋、魯迅兄弟など五人は夏目漱石の住んでいた本郷区西片町十番地ろの七号住居に引っ越した。十ヶ月後、また引越をする。それから1909年10月の帰国まで、魯迅は外国文学の紹介翻訳に全力を尽くした。当時彼は自分の祖国に対して強い危機意識を持っており、そして文芸をもって人間の精神を改造、中国の社会を改造しようという一貫した信念から、まず目をアジアや東欧のいわゆる被圧迫民族の文学、すなわち愛国者の文学に向けた。後に魯迅は当時の状況をこう語っている。「日本に留学していたころ、私たちはある漠然とした希望を持っていた——文学によって人間性を変革し、社会を改革できると思ったのである。この考えによって、自然に外国の新文学紹介という一事に思いいたった」（「域外小説集・序」、藤井省三訳）周作人も当時のことをよく覚えている。「実際私達の喜んでいたのは被圧迫民族の文学に他ならなかった」。しかし当時日本でこのような作品が「書店にまだ極く少なく蒐求は極めて容易でなく、幾種の露佛の小説が手に入る外は、東欧北欧のものは一見することさえ困難で」、結局「書名を書き出して、丸善に託して注文し、多くの根気と時間とを費やしてやっと波蘭、ブルガリヤ、ボスニヤ、芬蘭、匈加利、新希臘の作品を幾種か手に入れることが出来た。」[41]

こうして、魯迅兄弟は東欧の弱小民族の作品を中心として、翻訳を始め、『域外小説集』と題し、第一冊は1909年4月、第二冊は1909年7月に出版した。イギリスのワイルド、アメリカのポー、フランスのモーパッサンそれぞれ一篇、ロシアのガルシン、アンドレーエフなど四人七篇、ポーランドのシェンキェヴィッチ三篇、ボスニア人作家二篇、フィンランド人作家一篇、合計十作家十六篇をその内容とする。魯迅が訳したのは、このうちアンドレーエフの『噓』と『沈黙』、及びガルシンの『四日間』であった。これを見ると、文学に関心を深めたとはいえ、魯迅がなお

民族意識に燃え、文学の中でも弱小民族の文学に強い関心を寄せていたことが見て取れる。

『域外小説集』の出版は日本で関係者の注意を引き、第一冊出版後まもなく 1909 年 5 月の雑誌『日本と日本人』第 508 号には、次のような記事が載った。

> 日本などでは、欧州小説が盛んに購買される方であるが、支那人も、夫れにカブれた訳でもなからうが、青年の間には、矢張りちよいゝ読まれている。本郷に居る周何がしと云ふ、未だ二十五六才の支那人兄弟などは、盛んに英独両語の泰西作物を読む。そして『域外小説集』といった三十銭ばかりの本を東京で拵えて、本国へ売り付ける計画を立て、すでに第一編は出た、勿論訳文は支那語であるが、一般清国留学生の好んで読むのは、露国の革命的虚無的作物で、続いては、独逸、波蘭あたりのもの、単独な仏蘭西物などは、余り持て囃されぬさうぢや。[42]

しかし、当時の人々の関心はおおむね欧米文学に集中しており、この東欧文学を中心とした『域外小説集』はなかなか受け入れられず、半年で百冊しか売れなかった。結局残った本と版型は燃やされてしまった。こうして、魯迅の文学による人間と社会を改造する選択あるいは理念は最初からたいへん難しい局面に迫られたのである。

魯迅は日本に来てからずっとドイツ語を習い続け、日本からドイツへ留学しようと計画していたが、結局うまく行かなかった。そして国内にいる母親や妻が魯迅からの経済援助を希望したため、1909 年夏、魯迅は帰国、浙江省両級師範学堂の生理と化学の教員になった。

おわりに

七年余りの日本留学はさまざまな意味で後の魯迅の出発点となり、彼の思想と文学の骨格はこの時期に作り上げられた。帰国後、二十年近く、日本留学で得たものを生かして、公務員、教員という職についたが、国民の精神を変えることによって国を変えるという信念が一貫して彼の生涯を支えており、独自な人生を実現させた。こうした人生の原点が「自由に精神の大空を飛翔した、七年余の留学生活であった。」[43]

【注】

---

[1] 周遐寿（周作人）『魯迅の小説中の人物』（原題『魯迅小説里的人物』）、上海出版公司、1953 年 4 月、242 頁。

[2] 周遐寿（周作人）著、松枝茂夫・今村与志雄訳『魯迅の故家』、筑摩書房、昭和 30 年 3 月、60 頁。

[3] 「敬上郷先生請令子弟出洋遊学並籌集公款派遣学生書」、『浙江潮』（浙江同郷会）第 7 期、明治 36 年 10 月。

[4] 周作人の日記の手跡によるものという。『魯迅年譜・第 1 巻』（魯迅博物館魯迅研究室編、人民文学出版社、1981 年 9 月）88～89 頁を参照。

[5] 前出『魯迅の小説中の人物』、289 頁。

[6] 前出『魯迅の小説中の人物』、271～272 頁。
[7] 沈民「魯迅早年の弘文学院での断片的回想」、『文彙報』1961 年 9 月 23 日。
[8] 当時出版した『浙江潮』第 7 号（1903 年 8 月）の「通信欄」には、当時の学校の様々なことを記載しており、例えば、当時、弘文学院ではやすい方の「速成師範生」でも一ヶ月の費用は 25 円だったという。他の同類学校と比較すると、弘文学院は高い方に属していた。『中国人日本留学史』によれば、当時同じような学校である「東京同文書院」の月間費用は次のようだった。

学費：3 円、舎費：1 円 50 銭、食費：6 円、炭油費：1 円、月合計：約 12 円、つまり年間約 130 円。

当時、中国人留学生の急速な増加に応じて、日本留学案内というような本が次々出版された。例えば『日本遊学指南』（章宗祥編、1901 年）、『留学生鑑』（啓智書社著訳、1906 年）などが挙げられ、こうした資料によれば、当時一般的な留学費用は次のようになる。

学費	月額 1～2.5 円、年額 10～25 円
下宿料	月額 6～9 円、年額 60～90 円
学習用品費	月 3 円、年額 30 円
雑費	月額 3 円、年額 30 円

つまり、年間総額 150 円位～250 円位。

また、『値段史年表　明治大正昭和』（朝日新聞社、昭和 63 年 6 月）を見ると、年間授業料は、明治 32 年（1899）25 円、明治 37 年（1904）35 円であった。私立の慶応大学、早稲田大学もほとんど変わらないという。

以上から、弘文学院の営利的側面がよく分かる。

[9] 紹興出身日本留学生 29 人の「紹興同郷公函」は、現在紹興魯迅記念館に保存されている。
[10] 周啓明『魯迅の青年時代』、中国青年出版社、1957 年 3 月
[11] 許寿裳『亡友魯迅印象記』、人民文学出版社、1953 年 6 月、5 頁。筆者訳。
[12] 許寿裳『私の知っている魯迅』（原題『我所認識的魯迅』）、人民文学出版社、1952 年 6 月。
[13] 前出「魯迅早年の弘文学院での断片的回想」。
[14] 前出『魯迅の青年時代』に同じ。なお周作人『魯迅の小説中の人物』（上海出版公司、1954 年 4 月）278 頁参照。
[15] 明治十年代から二十年代にかけてのヴェルヌの流行については、富田仁『ジュール・ヴェルヌと日本』（花林書房、1984 年）に詳しい。
[16] 前出『魯迅の青年時代』。
[17] 明治 36 年 6 月、帝国大学を東京帝国大学と改称した。大学の構成は従来の通り、大学院と分科大学（法科大学、医科大学、工科大学、文科大学及び理科大学）をもって構成される。
[18] 第一高等学校編『第一高等学校六十年史』、昭和 14 年 3 月、498 頁。
[19] 前出『第一高等学校六十年史』498 頁。
[20] 陳友雄「日本における魯迅の二、三事について」、『山東師院学報』1977 年第 5 期。
[21] 前出『第一高等学校六十年史』。
[22] 前出「日本における魯迅の二、三事について」。
[23] 前出『魯迅の小説中の人物』230 頁。
[24] 当時の同級生の回想もこの事件の「真実性」を裏付けている。『仙台における魯迅の記録』153～154 頁を参照。
[25] 「吶喊・自序」を参照。魯迅の友人たち及び他の同時代の人による証言や回想から、魯迅がそうした性格だったということが分かる。
[26] 片山智行『魯迅』、中央公論社、1996 年 2 月、67 頁。
[27] 魯迅本人は彼の作品中に何回かこのことに触れている。ここで一番簡潔なものを引用しておく。「ロシア語訳『阿Q正伝』序及び著者自叙伝略」のなかで、魯迅は次のように書いている「わたしは仙台（Sendai）医学専門学校に入り、二年間学んだ。ちょうど日露戦争のときで、わたしはたまたま、幻灯で一人の中国人がスパイをはたらいたかどで斬られようとしているところを見、そのためさらに、中国でまず新しい文芸を提唱しなければならないと思ったのである。そこで、

わたしは学籍を捨てて、東京に舞いもどり、数人の友人とささやかな計画をたてた」(『魯迅全集・第9巻』116頁、筧文生訳)。
[28] 竹内好『魯迅』、未来社、1961年5月、65頁。
[29] 前出『魯迅』、70頁。
[30] 藤井省三『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年4月、115頁。
[31] 魯迅の初めての婚姻について、親友の許寿裳の回想はその実情を反映していると思われる。「朱夫人は旧式な女性で、結婚は太夫人(即ち魯迅の母親)の意志によるものであった。かつて、魯迅は私に<これは母親から送られたプレゼントで、私ができることはよく養うことでしかなく、愛情とかは私の知らないものだ>」という。(許寿裳『亡友魯迅印象記』、人民文学出版社)
[32] 前出『魯迅の故家』、265頁。
[33] 周作人『知堂回想録』、香港三育図書文具公司、190頁。
[34] 周作人「留学の回想」(原題「留学的回憶」)、『薬堂雑文』、新民印書館、1945年1月、94頁。
[35] 前出『魯迅の故家』、267～268頁。
[36] 周作人「東京を懐ふ」(原題「憶東京」)、周作人著・松枝茂夫訳『周作人随筆集』(改造社、昭和13年6月)所収、25頁。
[37] 前掲『魯迅の故家』、283頁。
[38] 前掲『周作人随筆集』、24頁。
[39] 増田渉『魯迅の印象』、角川書店、昭和45年12月。
[40] 周作人「東京の本屋」、周作人著・松枝茂夫訳『瓜豆集』、創元社、昭和15年9月、140～141頁。
[41] 前出『周作人随筆集』、142～143頁。
[42] 『日本及日本人』第508号「文芸雑事欄」、明治42(1909)年5月1日。なお、藤井省三「日本介紹魯迅文学活動最早的文字」、『復旦学報』1980年第2期参照。
[43] 片山智行『魯迅——阿Q中国の革命』、中央公論社、1996年2月、94頁。